



01

Customer Report 01

薄物板金、形鋼加工と切削加工の総合力で 事業展開に弾み

Japan 株式会社 竜洋

「切断や曲げだけでなく、削りができることは何よりの営業力になるはず」。創業以来、一貫して板金加工を手がける株式会社竜洋(静岡県磐田市)の鈴木恵専務は2021年8月に踏み切った切削加工進出への狙いをそう明かします。それは、板金加工専業から、より付加価値の高い事業展開に向けた第一歩でもあります。特定の企業系列に属さず全国から注文を受ける同社にとって、営業力強化は事業の成長に欠かせないからです。2016年の3次元レーザ加工機に始まるマザック機の相次ぐ導入は、内製化率向上や納期短縮など同社の目指す総合加工業戦略を着実に推し進めています。



02



03



04



05

- 01. さまざまな材質の製造に柔軟に対応する3次元レーザ加工機群
- 02. 鈴木社長(前列右から2人目)と鈴木専務(前列左から2人目)と同社社員の皆さん
- 03. FG-220 DDLによる長尺材の高精度3次元加工
- 04. 切削加工の狙いを語る鈴木専務
- 05. 同社の経営理念について語る鈴木社長

COMPANY PROFILE //////////////////////////////////////



株式会社 竜洋

代表取締役社長：鈴木 博之
専務取締役：鈴木 恵
本社所在地：静岡県磐田市南平松10-1
従業員数 116名

www.ryuyo.jp



一目見て導入を決めた 3D FABRI GEAR 220 II

竜洋は鈴木博之社長の祖父が1926年に創業。売り上げの60%は建設関連で、40%を農業、車両、環境、医療、食品などの各業界向けが占めています。業種の幅広さを反映するように、製品分野も建設資材をはじめ、空調設備、ダクト、ファンボックス、鉄製階段、昇降用タラップ、農業資材など多岐に及びます。

「量産志向ではなく、特注品主体なので、受注製品の付加価値を高めることを重視。価格決定権を認めていただく代わりに、他社に負けない優位性のある製品提供に努めています」と鈴木社長は経営理念を語ります。

「優位性のある製品づくり」のために貢献しているのが2016年に導入した3次元レーザ加工機、3D FABRI GEAR 220 II。「たまたま訪れた取引先の工場で見ている様子を目撃して、その日のうちに決めました。大型機の導入を見越して工場を空けていた矢先だったので、これだ!と思いました」(鈴木社長)。2017年に同400 II、2019年にはFG-220 DDLも加わり、マザック機のラインが整いました。



3次元レーザ加工機で加工された長尺パイプや形鋼を溶接した鉄製階段

▶ マザック機で加工された配管のジョイント部品と焼鈍ラック
建設業界をはじめ、環境、医療などさまざまな産業に貢献している

Customer Report 01
Japan 株式会社 竜洋

工数を減らし、精度を高め、納期を縮める

訪問先で鈴木社長の心を捉えたのは大物・長尺の素材加工や鉄骨材の切断・穴あけ・切り欠きなどができたことでした。

「実際、手作業でケガキを入れて加工していた頃と比べ、工数は確実に減り、精度は格段に上がりました。当然のことながら、納期も間違いなく短縮しています」(同)。

レーザ加工機が並ぶ第二工場では操作を担当するオペレータは「大物加工を難しくこなせるのが魅力。3台の加工機はワークの材質や用途で使い分けています。マザック機で加工スケジュールの設定さえしておけば、全自動で加工できるため、2台持ちも可能です」と使い勝手を評価します。

レーザ加工機に次いで導入されたのは5軸加工機 VARIAXIS i-800と門形マシニングセンタ FJV 5 Face-60/120でした。「板金製品には切削に必要な部品が多くあり、これまですべて外注に依存していました。それを内製化すればコストを圧縮し、納期を縮めることができます」(同)。



VARIAXIS i-800による切削加工で外注していた加工の内製化を実現

2022年には立形マシニングセンタ MTV-655/80とCNC旋盤 QUICK TURN 300の導入を予定。「価格決定権を保ちながら、他社にできないニッチな大物加工を訴求していく考えです」(鈴木専務)。



高精度なシミュレーション機能を持つCAD/CAMソフトウェア「FX TUBE」により、前段取りを短縮

次代をにらむ総合的な体制整備も着々と

「切削に関しては、さらに磨きをかけていきたい」と意気込む鈴木社長。板金に自前の切削が加わることによる総合的な事業展開に期待を寄せています。その一環として、マザック機を含む先進的な板金加工の無人化ラインの構築が検討されています。

また、3年以内をめどに専務が経営バトンを引き継ぐ計画もあります。鈴木社長は「製造業として生きていく以上、他社よりも先に進みたいと願っています。その道筋をつけるため、切削部門の事業会社を傘下に収めたり、マザック機を導入したりしてきました」と事業承継を見据えた戦略の一端を明かします。

鈴木専務も「社内には同世代が多いので、話は早いし仕事も進めやすい。それだけに、技術や設備や人の面で整えられたお膳立てをどう生かすかが問われていると思います」と心構えを語ります。

数年後に迫る創業100周年に向け、次代をにらんだ同社の体制整備は手堅く進んでいるようです。

